

見られる側からの風景

坂田三允（長野県看護大学）

サッチーとミッチーの戦いはいつまで続くのだろう。一時下火になったかに見えたのに、なんとか審議会（？）が不起訴を不当としたとかで、またワイドショーで騒いでいると患者さんが教えてくれた。「（不起訴ということでは）国民が納得しないでしょう」とコメンテーターがいったそうだ。国民って一体誰のこと？ 私はかなりのミーハーだと自認しているけれど、スキャンダルばかり追いかけている最近のワイドショーにはもうついていけない（実際に見ているわけではないのだが）。

この本が、書店に平積みされているベストセラーだとは知っていた。著者は、説明するまでもないことだが、あの山口百恵さんのご主人である。この本は、そのワイドショーに十数年にわたって追いかけられ、「1970年代後半から90年代の前半まで、ワイドショー、芸能週刊誌、写真誌を含む芸能マスコミは、夏の海水浴客で賑わう海岸に放たれたジョーズのような存在に思えた」著者が、マスコミとの関係を軸にして、「折々に綴った、俳優として、夫として、父としての熱き真情」（帯封）をまとめたものである。

しかし、休日にたまたま見るともなく見ていた「徹子の部屋」に著者が出演していなかったなら、私はこの本を手にはすることはなかっただろう。番組のなかで著者自身がつけたこの本の題名が『被写体からの風景』であり、「この風景は被写体である私たちにしか見えない」と聞いたとき、ふと読んでみようという気になった。

確かに、私たちは被写体から見た風景を知ら

ない。この本を読んで本当にそう思った。盗撮や尾行は、いうまでもなく日常茶飯事。「取材陣が集まりだしたのは、（中略）出産直後からだった。山王病院の表は交通量も非常に多く、駐車スペースもない。そこに報道の車が何台も集まる。報道陣は歩道にあふれ、通行もままならなくなる」「あなたたちが集まるのは我慢するとしても、せめてたばこの吸い殻や飲み物の空缶は持ち帰ってほしい」などという事態が続く。やがて長男の入園式の日がやってくる。「子供が怖がって泣いているからやめてくれ！と叫んだ」にもかかわらず、「（車の）ドアが開いたのをいいことに一人のカメラマンが、フロントガラスよりのすき間から車内に片手でカメラを突っ込んで後部座席の妻と子供を撮ろうとした」。そして結局、幼稚園にはたどりつけず、家のベランダで家族だけの記念撮影をすることになってしまう。

「芸能人に限って言えば、確かに売名目的」で追われない人もいるかもしれない。けれども、そっとしておいてほしいと願う人をそっとしておけないほど、報道するに値する情報が不足しているとも思えない。

自分が当事者ではないとき、テレビに写し出される映像は、見る人にとってはただ目の前を通りすぎていくだけの情景のようなものでしかないけれど、写し出された人にとっては生活そのものだというのを、私たちは忘れてはならないだろう。



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院（精神科婦長）を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。

●長野県看護大学：長野県駒ヶ根市赤穂1694